

今年度の全国大会は、第10回の記念すべき会となりました。岐阜聖徳学園大学附属幼稚園・小学校・中学校との合同研究会として、10月21・22日に岐阜聖徳学園大学にて開催されました。加藤会長の挨拶にありましたように本会の前身は、昭和55年（1979）に東京の板橋区で「個別化教育研究会」として立ち上げ、5年後に「全国個別化教育連盟」として全国組織となりました。東京、東海、関西、九州の地方研究会を組織しました。後に「全国個性化教育連盟」と改称し、10年前平成20年（2008）「日本個性化教育学会」として整える事が出来ました。実に40年にわたり活動してきた歴史があります。今回、日本個性化教育学会となり10回目の全国大会を開催するに至りました。会員の皆様に、その報告を行います。



## <第10回日本個性化教育学会・岐阜大会>

○テーマ **新学習指導要領の精神を子どもの確かな育ちはどうつなげるか  
～個性化教育からのアプローチ～**

○期 日 2017年10月21日（土）・22日（日）

○会 場 岐阜聖徳学園大学

○日 程 1日目 10月21日（土）

9:30～10:10	岐阜聖徳学園附属案内
10:10～12:10	岐阜聖徳大学附属 幼稚園 小学校 中学校 学習公開
13:40～14:00	日本個性化教育学会 開会行事
14:00～14:45	基調講演「新学習指導要領の精神と個性化教育」奈須正裕（上智大学）
15:00～17:00	分科会



### 《分科会 A》

「知識・技能の定着と、教科横断的で汎用的なスキルの育成をめざして」

コーディネーター 小林直樹（岐聖大）  
 コメンテーター 伏木久始（信州大） 芳賀高洋（岐聖大）  
 話題提供 小林永児（附属小） 岡村佳宏（附属小） 山崎優（附属小） 小椋幸美（附属中）

### 《分科会 B》

「主体的・対話的な問題発見と、思考力・判断力・表現力の育成をめざして」

コーディネーター 佐久間茂和（台東区立教育支援館）  
 コメンテーター 佐野亮子（東京学芸大） 石原一彦（岐聖大）  
 話題提供 近藤敦至（附属小教務） 野田宗憲（附属中） 竹村和代（附属中）

### 《分科会 C》

「社会や世界と関わりながら、人間性を深め主体的に学びに向かう力の育成をめざして」

コーディネーター 柘植良雄（岐聖大）  
 コメンテーター 浅沼茂（立正大） 加納誠司（愛知教育大） 大石晴美（岐聖大） 龍崎忠（岐聖大）  
 話題提供 岩田龍明（附属小） 小松俊保（附属小） 山田充代・桑原佐知子（附属小）  
 迫間隆志（附属中）

### 《分科会 D》

「幼・小・中の組織的な教育活動の改善と、魅力的な園・校づくりをめざして」

コーディネーター 鈴木正敏（兵庫教育大）  
 コメンテーター 伊藤静香（帝京平成大）  
 佐々木みどり・西川正晃・足立望・テイラー クレア（岐聖大）



話題提供 宮島康広（附属幼 園長）山田亜都子・成瀬幸恵（附属小）  
小木曾美幸（附属小）長尾美武（附属中）

### 《分科会 E》

「学習指導の在り方と、個に応じた指導の充実をめざして」

コーディネーター 澤田稔（上智大）

コメンテーター 加藤幸次（本会会長）玉置崇・宮川啓一（岐聖大）

話題提供 山野真琴（附属小）伊藤和幸（附属中）芥川千里（附属中）加藤英樹（附属中）  
宮部和男（附属小 教頭）黒木美佐緒（附属中）桑原常晴（附属小 校長）



## ○日程 2日目 10月22日（日）

9:00～10:00 理事会

10:00～12:30 分科会・自由研究発表

### 《分科会 A》「知識・技能の定着と、教科横断的で汎用的なスキルの育成をめざして」

コーディネーター 小林直樹（岐聖大）

コメンテーター 伏木久始（信州大）

指定発表 伊倉 剛（愛知教育大学附属岡崎中学校）

中田雄大（信州大学教育学部附属松本中学校）

### 《分科会 B》「主体的・対話的な問題発見と、思考力・判断力・表現力の育成をめざして」

コーディネーター 佐野亮子（東京学芸大）

コメンテーター 石原一彦（岐聖大）佐久間茂和（台東区立教育支援館）芳賀高洋（岐聖大）

指定発表 佐久間茂和（台東区立教育支援館）

池田信一（福岡/志免町立志免西小）・五十子晴美（東京/台東区立東泉小）

佐藤卓生（山形/山形市立第四小）

### 《分科会 C》「社会や世界と関わりながら、人間性を深め主体的に学びに向かう力の育成をめざして」

コーディネーター 柘植良雄（岐聖大）

コメンテーター 浅沼茂（立正大）加納誠司（愛知教育大）大石晴美・龍崎忠（岐聖大）

話題提供 奥川正規（愛知/安城市立丈山小）河合哲也（愛知/刈谷市立住吉小）

### 《分科会 D》「幼・小・中の組織的な教育活動の改善と魅力的な園・校づくりをめざして」

コーディネーター 鈴木正敏（兵庫教育大）

コメンテーター 伊藤静香（帝京平成大）

西川正晃・テイラー クレア（岐聖大）

話題提供 大庭裕（明海大）鈴木正敏（兵庫教育大）

### 《分科会 E》「学習指導の在り方と、個に応じた指導の充実をめざして」

コーディネーター 澤田稔（上智大）

コメンテーター 加藤幸次（本会会長）玉置崇・宮川啓一（岐聖大）

話題提供 竹内淑子（愛知/半田市立宮池小）竹内 学（愛知/東浦町教育委員会）

小野三夫（元東海市明倫小主幹）

### 《自由研究発表》

コーディネーター 谷口育史 姫路大、山本克典 神戸国際大

研究発表 浦郷 淳 佐賀大学雲霞教育部附属小学校

近藤茂明 名古屋大、幸村怜奈 名古屋大学大学院

小山貴博 函館大谷短期大、谷口育史 姫路大

箱根正斉 西宮市立六甲台小学校

藤本勇二 武庫川女子大



## 13:30～15:45 《シンポジウム 「子どもが主体となる学校づくり」》

コーディネーター 佐野亮子（東京学芸大）

実践報告 宮坂昌一（長野/茅野市わかば保育園）松倉紗野香（埼玉/上尾市立東中学校）

三浦信宏（カンボジア/プノンペン日本人学校）

指定討論 佐藤真（関西学院大）加納誠司（愛知教育大）

15:45～16:00 閉会行事

16:00～16:30 会務総会

## 基調講演 「新学習指導要領の精神と個性化教育」

奈須正裕（上智大）



新学習指導要領では、道徳の教科化、小学校英語、プログラミング教育などが話題となっているが、在来の教科等については時数も指導事項もほとんど変化はない。

むしろ今回の改訂における最大の変化は、資質・能力を基盤としたものへの、学力論の拡張である。それは、①自在に活用の効く質を兼ね備えた「知識・技能」、②未知の場面でも適切に発揮される「思考力・判断力・表現力等」、③意欲や感情、対人関係の自己調整能力などの「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱で子供

の学びと育ちを計画し、見とることである。教える内容を変えずに子供に身に付くものを変えるのであるから、教え方を変える必要がある。それが、「主体的・対話的で深い学び」である。

このような学力論の拡張には、グローバル化の進展やAIの進歩といった社会的な要因も深く関わっているが、1970年代以降の人間の学習と知識に関する学術的な研究の蓄積がこれを基礎づけている点が併せて重要である。具体的には、人生の成功において単なる知識の所有は十分な予測因ではないことや、むしろ非認知的能力が重要であることが指摘されてきた。カリキュラム政策が学習理論を参照するのは欧米では常識だが、日本ではこれまで十分になされてこなかった。今回の改訂では、この点が大きく変わった。

「主体的・対話的で深い学び」の実践に際しても、中教審答申は「人間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉え」ることが大切であるとしている。心理学を中心とした近年の学習研究は「すべての子供は生まれながらにして有能な学び手である」ことを明らかにしてきたし、「学びは状況に埋め込まれている」といった事実認識の重要性を指摘してきた。これらを踏まえた教育方法として1980年代以降広がりを見せてきたのが、学びの文脈を本物にする「オーセンティックな学習」であり、子供が学校以外の場で獲得しているインフォーマルな知識や素朴概念を大切にしたい授業づくりである。



個性化教育は、1960～70年代のイギリスのインフォーマル教育やアメリカのオープン教育に学び、これを日本の教育風土に適合する形で発展させてきた。そこでは、①教育の「個性化」とは教育の「人間化」であるという基本理念の下、②情意や社会性をも視野に入れた豊かな学力論を位置付け、③子供の学ぶ力を信じ、一人ひとりの持ち味を最大限発揮できる学習環境の整備を教育方法の中心に据えることで、④学校での学びが一生に渡ってその子の人生を支え続けることを意図し、社会に開かれた「本物」の学びが目指されてきた。このような個性化教育のあり方は、新学習指導要領と軌を一にしている。

### 【分科会 A 1・2日目】

#### 資質・能力の定着と、教科で汎用的なスキルの育成をめざして

1日目は、岐阜聖徳学園大学附属小学校と同附属中学校の4人の先生に、実践報告をしていただき分科会を進めた。

附属小の小林永児先生は、6年生の総合的な学習の時間「伝統」をさらに発展させ、算数と音楽を統合した学習を展開した。「伝統」で学んだ箏をとりあげ、リコーダーやチューニングアプリを利用して、音階と箏の弦の長さの関係をしらべてみた。児童は「高いド」の弦の長さは「低いド」の2分の1であることに気づいた。さらに、「ひよっとすると、音階と弦の長さは、分数や比と関係しているのではないかと考えるようになった。「2教科を統合する場合、はみ出した領域が大切で、例えば、この学習を、音楽の創作活動に発展させていくことなどが可能ではないかとアドバイスがあった。箏を数量的にとらえたこの実践は、様々な授業の場面での可能性を考えさせてくれた。



附属小の岡村佳宏先生は、2年生の算数で「長さと単位」を一斉授業で展開した。釣り上げた魚の長さを、「電話でどのように相手に伝えたらよいか」と児童に問いかけた。児童は、「指の長さで計ればよい」「ものさしを使う」などいろいろなアイデアを出しあい、仲間とともに新しいことを発見した喜びを感じ取ったようだった。「一斉授業でも、すすめ方を工夫することで、児童相互の対話は十分に可能で、興味がどんどん発展していく」と指摘があった。一方、理解が不十分な児童が、「仲間と相談したいな」と感じているときに、先生が入って行って、先生が教えてしまう mismatch な場面も生じやすい。個の指導をするときに注意すべき点といえる。児童が自分で歩いていくことが、学びの基本にあってほしいと感じた。

附属小の山崎優先生は、6年生の社会科「日本とつながりの深い国々」の単元で、コースを設定して「一人学び」の学習に取りくんだ。この学習をとおして、児童が自分の力で学習を進めていく力を身につける

ことをめざした。さらに、児童がまわりの人に問いかけることで、仲間とコミュニケーションを深め、相手に自分の考えを説明できるようになるなど、汎用的スキルを身につけることをめざした。「調べるコース」「カードで学習するコース」「不得意な子のコース」の3コースを準備した。各自が、選んだコースごとに、家庭学習も含めて様々な学習活動を展開した。「調べるコースについては、創作的な展開や、プロジェクト的な展開も考えられるのではないかとアドバイスがあった。さらに多様なコース設定も可能なのではないかと、自分なりに勝手に想像してみた。



附属中の小椋幸美先生は、一人学びの「パッケージ学習」について報告した。附属中学校では各教科で1～2単元、全体の1～2割を目安に「パッケージ学習」を行っている。設定されたテーマをみて、生徒が自己の興味・関心を認識し、最終的な到達目標を考えてテーマを決定する。学習の方法や手段は自分で考え、活動を進めるペースも自分で考えていく。最終的にどのようにまとめ、表現するかも自分で考え、なかには劇で発表する生徒もいて、楽しく学習している。「興味・意欲にもとづいて、自分で計画し問題解決していく学習は、これからますます大切になっていく」と、この実践をサポートする指摘がなされた。このような学習活動のなかで、まわりに流されてただらだらしている生徒や、「めんどくさい」と思う生徒も見うけられ、課題として残っている。また、このような学習が進路にも生かされていくように、こらからの高校・大学の入試改革が望まれる。(文責 神奈川 松本和平)

A分科会2日目は、信州大学教育学部附属松本中学校の中田雄大氏の「実社会・実生活における知識・技能・思考を育む教科横断的な学習」と、愛知教育大学附属岡崎中学校の伊倉剛氏の「子ども任せの授業からの脱却～見方・考え方を働かせた問題追及の在り方について～」の二本の指定発表を基に協議が行われた。二本とも優れた教育実践に基づいた、分科会のテーマに深く迫る研究であり、論議が深まった。

◎信州大学教育学部附属松本中学校の発表の概要 (実践例の紹介を中心に)

家電製品の働きを調べるという学習の場の中で、「電気が通じると発熱するのが通常なのに、何故、冷蔵庫やエアコンは冷やす機能を有するのか」という理科の学習内容に関わる「問題」を発見させ、手がかりとしてペルチェ冷蔵庫という素材を提供し、理科学習における思考(見方・考え方)と合致・関連する数学や技術家庭の思考(見方・考え方)を働かせ、生徒それぞれが問題解決や発展的学習を展開していく中で、これからの社会で生き抜くための資質・能力(汎用的スキル)を育成することを目指した教科横断的な学習活動を構築した。

◎愛知教育大学附属岡崎中学校の発表の概要

授業の中で、個々の生徒が他の生徒の発言と自分の課題を関連づけて聞き合い、考えるという活動において、新たな見方で捉えてよりよい考えを生み出すという段階に高めていくために、「二段階思考」という手立てを考案した。これを、教科等を横断する、認知的・社会的・情意的な汎用的なスキルの一環として位置づけ、生徒が「見方・考え方」を適切に働かせて「深い学び」を実現していく上で重視している。

○課題：資質・能力(汎用的スキル)の評価に関してこれからの重要な課題であるとの認識が共有された。(文責 神奈川 池田伊三郎)

**【分科会B 1・2日目】**

**主体的・対話的な問題発見と、思考力・判断力・表現力の育成をめざして**

分科会Bでは、学習空間・学習環境と連動した授業改善、ICT環境と指導観の転換、学びの主体性を意図した授業デザイン、対話的な学びによって既有知識を洗練・統合する手立てと工夫、などに焦点を当て、具体的な実践報告や事例を通して、「主体的・対話的で深い学び」のイメージと、さらなる創意工夫への一手を2日間かけて考えた。両日とも、コーディネーターは佐野亮子(東京学芸大学)、コメンテーターは、佐久間茂和(台東区立教育支援館)、石原一彦(岐阜聖徳学園大学)である。2日目には、芳賀高洋(岐阜聖徳学園大学)がコメンテーターに加わった。



第1日目の話題提供の最初は、岐阜聖徳学園大学の附属小学校である。近藤敦至は「ICT環境と自立を目指した「情報」の学習」として、附属小学校のICTの実践を、電子黒板やインターネットの活用、iPadの活用、5・6年生の一人一台のタブレットの活用など、多様なICTを活用した実践を報告した。次の附属中学校の野田宗憲は「パッケージ学習における学びの主体性と社会性の育ちをめぐる」として、全教科で実施しているパッケージ学習の中から、国・数・理・英・保健の5教科についての生徒へのアンケートを元に、一斉授業とパッケージ学習の好感度の比較を報告した。3日目の附属中学校の竹村和代は「中学校の教科センター型校舎の活用と新しい学習環境づくりへの挑戦」として、附属中学校の「教科センター」の実践を報告した。まだ、全国的には珍しい中学校の教科センターだが、ここでの教科教室の経営や運営に積み重ねを感じた。特に、教科教室の学習環境は新鮮で、効果的な環境と感ずることがで

きた。

第2日目の指定発表の最初は、「ICTは授業を変えることができるのか」とした、台東区立教育支援館の佐久間茂和である。ICT環境は全国的に加速度的に充実されている中で、ICTが授業を変えるための方策を提案した。2つめは、「特別支援学級での「週プロ」における子どもの学びと育ち」とした、福岡県志免西小学校の池田信一と元台東区立東泉小学校の五十子晴美の発表だった。特別支援学級の5人の子どもたちが、2教科同時進行の個別学習に取り組んだ実践報告であった。特別支援学級の子どもたちができるのかという疑問は杞憂で、遠く離れた東京から駆けつけたサポーターによる学習環境と、担任の一人ひとりを包み込むような支援で、子ども達が成長していく姿が感動的だった。「教科学習における子どもの育ち」とした、山形市立第四小学校の佐藤卓生の発表は、「経験されたカリキュラム」として、過去の学習や他教科での活動が「経験されたカリキュラム」として「デフラグメンテーション（最適化、再配置）」されるという事を生かした実践報告だった。



話題提供3つと指定発表3つと、内容もジャンルも多様だったが、参加者からの意見もよく出されて、本分科会が提案した「主体的・対話的な問題発見」「思考力・判断力・表現力の育成」について、強く感じる事ができた2日間だった。(文責 東京 佐久間茂和)

### 【分科会C 1・2日目】

#### 社会や世界と関わりながら、人間性を深め主体的に学びに向かう力の育成をめざして

この分科会では、1日目は岐阜聖徳学園大学附属小・中学校の授業公開とその中での子どもの姿、小・中での実践発表を通してテーマに迫った。2日目は義務教育の入り口と出口を意識して授業実践の発表を通して、子どもが主体的に学びに向かい人間性を深めていくプロセスとは何か、いかにカリキュラムをデザインすれば学んだ後も進んで人生や社会、世界と関わっていくのか議論が進められた。



1日目には、「じぶんづくり」「なかまづくり」を中心に据えた生活科の実践報告、他との関わり、よりよい生活につなげる宗教行事と道徳の授業及び伝統に特化した総合学習（伝統学習）、小学校の海外生活体験やビデオ会議システムを活用した遠隔授業の実際、イギリス海外語学研修に参加した生徒の意識変化の4つの話題提供があった。

生き生きと授業に参加する子どもの姿を始め、小学校における年1回の海外体験、9日間の海外語学研修など、私学の附属校ならではの体験、宗教行事など語られ大変興味深かった。

2日目には、一つ目は、義務教育の入口として2年生が1年間教室で13羽のウサギと一緒に生活する生活科の授業実践発表であった。1羽の死、5羽の誕生と直面した子どもたちは深い追求を行っていった。この実践を通して、子どもたちは「健康観察で気附く力、病気を看る力（二度と死なせたくないという強い思い）そして、健康観察の結果から何をすれば良いのか考える力、触れあいたい他のクラスの子どものために一羽一羽の個性を伝える力などが大きくなりとして発揮された。そして、仲間と支え合い、死を受け止め乗り越え、すべての命を慈しむ力が育っていった実践であった。

出口では、坊ちゃんカボチャNEW刈谷ブランド作りの実践であった。これは、卒業生の言葉によると、自らカボチャを育て、料理を考え、調理し、社会へPRし、販売するという授業であった。何か成し遂げるといった一連の体験が仲間との結束力、社会へのつながりといったあの時期に必要なことにつながっていった。当日この実践を経験した大学4年生の卒業生、近藤さんが参加され、実践について自分の生き方に与えた影響について「このような場で、自分の言葉で話ができる表現力や行動力を育ててくれた授業であったと思います。」と語られた。大変貴重な経験を参加者も共有する場面でもあった。

2日間を通して、子どもが主体的に学びに向かい人間性を深めていくのは、まず、遊びがすきであること、子どもと教師が近づくこと、遊びの中にある学びを引き出していくことが大切である。また、子どもが深く考えるのは、価値観がぶつかったときであり、そのようなプロセスが仕組まれることである。また、カリキュラムデザインとして、地域にある社会資本の効果的な活用、教育の現場に業界を巻き込む等学びのフィールドを地域に求めることが提示された。教室が自分とものの対話する場であり、直接社会とつながっている場にする事が大切である。

(文責 埼玉 多田信夫)

### 【分科会D 1・2日目】

#### 幼・小・中の組織的な教育活動の改善と、魅力的な園・校づくりをめざして

分科会前半は幼小連携について、スタートカリキュラムや生活科を手がかりに、後半は小中連携について英語学習を手がかりに討議を深めた。

前半の部では、まず岐阜聖徳学園大学附属幼稚園長の宮島先生より、「幼稚園から見たスタートカリキュラムの実際」という演題で、スタートカリキュラムのあるA小学校と、スタートカリキュラムのない附属小学校それぞれとの交流の様子が報告され、学ぶことに期待をもつ子どもたちに、小学校で「学びの場としての楽しい授業」の充実を望むといった提案があった。



続いて、岐阜聖徳学園大学附属小学校の1年生・2年生の担任でもある山田先生・成瀬先生から、生活科を中心とした附属幼稚園・附属小学校の交流の様子が報告された。七夕祭りや秋祭りなど、幼稚園児を招待していることや、活動を通しての児童の成長の姿が報告された。

後半の部では、まず岐阜聖徳学園大学附属小学校小木曾先生より、「English world テラス」についての報告がなされた。英語だけで会話したりゲームをしたりするスペースを週2回、お昼休みを使って開催されていることが報告された。英語でのコミュニケーションを楽しむことを目的に、ネイティブスピーカーの協力なども得ながら進めていることが紹介された。

最後に、岐阜聖徳学園大学附属中学校の長尾先生より、中学校の英語として英語劇や英語ディベートの実践例を通して、英語科における言語教育を考える視点を提示された。岐阜聖徳学園内外全体の人材を駆使して語学力を向上させようとする取り組みが紹介された。



コメンテーターからは、幼小接続での子どもの姿での接続の大切さや、英語での交流スペースにおいて子どもと接する大人が自信を持って英語が話せるスキルが必要なことなどがコメントとして寄せられた。

フロアからの質問では、幼小接続における子どもの成長の見方であったり、英語の学習を進める上での人的なものも含めた学習環境についてであったりが出され、議論を深めることができた。幼・小・中の接続について、多様な視点からの討議を行うことができた分科会となった。（文責 佐賀 浦郷淳）

2日目の大庭先生は、小・中連携と大学との連携までの検討に広がる発表であった。大学生や留学生と、児童・生徒との英語を通しての交流は、小学校英語の原点であった国際理解の観点からも有効なコミュニケーションとなる。大学が行うイベント型の交流についてのメリットに気づかされた。ただし、連携を考える際には、大学側が小・中・高等学校との関わりの中で、できることとそうでないことがある現実も認識をせねばならない。また、連携には、英語教育と学校間の教育を結びつけるコーディネーターが必要であり、その人材の確保が喫緊の課題ともいえる。そうした中での、成功例としての事例紹介は参考になった。

特に小学校で楽しみながら既習した事項が、中学校になると文法的認知へ変化してしまうことを例にして、中学校へ接続するための小学校英語の高度化について、ゼロスタートとの現状という点からコメンテーターが指摘をし、フロアからの質問も出た。また、台湾からの先生方からのコメントでは、台湾の小学校英語教育については大変に成功をしており、むしろ失敗例を探しているところだ、という話が印象に残った。唯一の課題はスピーキング能力の向上について、とのことである。スピーキング能力の向上及び評価については、日本でも検討がされているが、それはさておき、日本では成功例を探し、共有し、参考にし、実践することで小学校英語教育の向上に努めている現状である。日本も、成功例は通例として検証の対象にはならず、失敗例を探し、その検証をメインとした小学校英語教育研究が主流となる日は来る可能性があるのだろうか、ということを考えさせられた。

続いて、鈴木先生は、まず当事者として… stakeholders の概念が根幹にある、という基本的な視点の出発から、特に幼・小連携について事例を示しながらの発表であった。子どもの、かたつむりの食べ物と排泄物の実験例で、ある果物を食べたらカタツムリは死んでしまったことは、実験的には失敗であるが、ある結果ができ、それを論理的に思考することにつながる点では重要なことだといえる。そのような興味深い事例からの指摘に始まり、連携についての背景とポイントが示された。一口に連携といっても、背景や文化が異なり、1日目の発表からも言われているように教師同士が連携をする、交流を持つための時間も限られている。そのような中で連携のポイントとして、育てたい子ども像について考え、目指す子ども像を統一することが重要であるとした。それらを踏まえると、何が必要か、どのような環境で子どもが主体的な学びになるかを見ることができると述べている。子どもを学びの視点から考えたとき、子どもの立場にたって考える。子どもの一つの行動の理由、目的、周りで起きていること、自分が変わっていることについて「納得」しているか、を見ることが重要である。教える側として、学ばせたいことと子どもの意見が一致しているか、それが個性化につながるか、という重要な観点が指摘された。子どもの幼稚園→小学校移行に関する研究より、児童の不安要素は給食、友達、勉強、期待要素は勉強、身体的活動という結果であった。幼児期の探求の体験、グループ活動が多いところは就学してから、友達について不安がないという結果は幼・小連携の重要なカギになりそうである。スタートカリキュラムの事例としては、ゼロスタートでなく過去の生活をベースにしていることが示された。1日目の報告と関連して、コメンテーターからは、交流イコール連携ではなく、交流自体を目的にしてしまうことの問題が指摘された。幼・少連携は目の前の子をどう育



てようかと考えることが重要である。普段の授業・保育をしていることが、一つ一つの連携となり得ることを見通しての教育の意義を考えた。フロアにいる現場の先生方からも意見が出され、子どもたちの主体的な学び、共同・幼児教育がまずどのようなものか、どうあるべきかの出発点を捉え、教育における幼・少連携研究の本質が問われる、有意義な分科会であった。（文責 東京 伊藤静香）

## 【分科会 E 1・2日目】学習指導の在り方と、個に応じた指導の充実をめざして

話題① パッケージによる一人学びの可能性と期待 山野真琴（附属小）

附属小学校での自身の実践から学習パッケージによる一人学びの可能性と期待についての発表があった。パッケージ学習を行うことで教科の力だけでなく教科で身に付ける以上の力が期待できるというものであった。



話題② パッケージ学習の可能性と期待 伊藤和幸（附属小）

高校の範囲までの内容をパッケージに盛り込んだ学習の報告があった。中学校の範囲だけでは解決できないことを深く学ぶことで教科の学習に興味・関心をもちさせることができるという報告であった。

話題③ 本校国語科における「主体的・対話的で深い学び」をめざした実践 芥川千里（附属中）

授業は初読の感想から生徒と共に課題を設定し全体・グループ・個人で読み進めたい事柄にわけ授業を展開するという実践であった。調べたことを生徒同士に議論させることで主体的・対話的な学習を目指すという発表であった。

話題④ 学習指導の在り方と、個に応じた指導の充実をめざして 加藤英樹（附属中）

実践の中で大切にされている「一人ひとりを大切に」「他人と比べない」「ゆっくり動く」「準備体操・整理体操を大切に」ことについて具体例が述べられた。人生の中でスポーツに上手に関わるための指導を心がけていきたいというものであった。

話題⑤ アフタースクールの実践から 宮部和男（附属小 教頭）

指導者との連携の中で「本物にふれる」ことを大切に、子どもたちの興味関心を広げながら、可能性を伸ばしていくことを考え放課後に様々な講座を設定する等、個に対応するための教育環境が設定されていた。

話題⑥ オープンセミナーの実践から 黒木美佐緒（附属中）

興味関心に合わせて放課後に学習行うセミナーでは、教科の形態や内容にとらわれず生徒の学びの要求に応じて場を提供しているが、個に応じるためには改善すべきところがあるというものであった。

話題⑦ コンピテンシー重視の「主体的・対話的で深い学び」と教師の意識改革をどう加速させるか

桑原常晴（附属小 校長）

教師が児童の理解に努め、自ら学び実践したことに対しては認め励ましていくことを基本にし、子どもの成長を楽しみにできる教師が素晴らしいという考えを職員全体で共有していくことが大切であるとお話された。

それぞれの発表から、個に応じて指導することは形や時間にとらわれず子ども一人ひとりの立場に立ちどの学習の仕方が良いのかを考えることが大切であると再確認できた。（文責 附属小 山野真琴）

2日目は、3名の指定発表があった。愛知県半田市立宮池小学校竹内淑子氏、愛知県東浦町教育委員会指導主事竹内学氏、元愛知県東海市立明倫小学校主幹 小野三夫氏の3名である。

両竹内氏はパッケージ学習の実践発表である。パッケージ学習は実践者にとって手応えのある学習のしかけであり、子どもたちの学びの姿も確実に変わっていくし学習力を身につけていく。

それなのになぜ、学習の手立てとして一般化しないのか。これは今回の分科会のみでなく、これまでも何度も課題として取り上げられている。個人レベルで実践できる小学校においては、開発の大変さや子どもに任せてしまう不安などがあげられる。中学校では、生徒指導で大変なのに研究どころではないという声を聞く。つまり、教師が教えるから学習は成立し、子どもたちは自らの意思で学習を成立させていく存在ではないと決めつけてしまっているのが、実践に踏み出さない教師の言い分である。そしてこの壁は実際に乗り越えがたいものとして存在する。実はこの壁の上に登って、そこから子どもたちの豊かな学びの姿を実感するしかないのであるが……。両竹内氏は壁の上から何度もこの絶景を眺めているのである。もっと多くの教師にこの景色を眺めてもらいたいと切に願う。

小野三夫氏は、コミュニケーションタイムを手立てとした学びあいの発表である。生活作文の中から題材を拾いコミュニケーション能力を育成していく。話し合いをとおして自己肯定感を育て、お互いを深く知り合いより望ましい学級コミュニティを形成させる。発表で使用したビデオには、生き生きとした子どもたちの姿が活写されていた。小野氏はこの話し合いの力を育てる手立てとして、国語科とリンクさせている授業名人でもある。（文責 岐阜 宮川啓一）

## シンポジウム 「子どもが主体となる学校づくり」

コーディネーター 佐野亮子（東京学芸大）  
実践報告 宮坂昌一（茅野市わかば保育園） 松倉紗野香（上尾市立東中学校）  
三浦信宏（プノンペン日本人学校）  
指定討論 佐藤真（関西学院大） 加納誠司（愛知教育大）

シンポジウムは、前半はそれぞれの園・学校の紹介と実践報告がなされ、後半は自由に協議する展開で行われた。茅野市わかば保育園長の宮坂先生は、元長野県公立小学校長で、子どもと共に創る信州総合を長年実践されてきた。その手腕を幼児教育でも発揮し、子どもの日々の遊びの中で発動する好奇心や培われる探究心を丁寧にみとり、それを保育者と共有していく中で、若い保育者たちが「子どもたちとこんなことやってみたい(畑を作り収穫する、蚕を育て糸をとる、ヤギを飼い乳をしぼる)」と本物との出会いにのめり込んで、子どもと共に追究者になっていくダイナミックな活動の様子が語られた。プノンペン日本人学校長の三浦先生は、打瀬小学校など千葉市のオープンスクール教育を牽引されてきた方で、カンボジアで初の日本人学校の設立に関わり学校づくりに取り組んでいる。学校教育目標は子どもが言えることが大事と「ともに(共生) みがき(自分みがき) はばたく(自己実現) 子の育成」を掲げ、学校を毎日が楽しくワクワクする「知的遊園地」にするために、異学年交流での協働学習や、地域へ飛び出す体験授業や専門家から学ぶ本物の授業、現地校との交流による文化理解など、日本人学校の特色を存分に生かした実践の様子が語られた。上尾市立東中学校の松倉先生は、文科省研究指定校で「グローバル・シティズンシップ科(GCE)」の開発を推進する研究主任である。GCEは「①社会参画意識の向上、②持続可能な社会の担い手を育成、③多様な他者と協働できる力の習得」を目指し、その実現(仕組みづくり)のために他教科との連携や多様な機関との連携を図っている。その一端の事例として、国語で身に



付けた力を生かして環境省にアポをとり、地球温暖化の情報や資料を収集・整理・判断し、自分たちができることを考えるとといった実践の様子や、3年間で新教科のカリキュラムをどのように創ってきたかについて語られた。

シンポジウムの後半は、実践報告を受けて、佐藤先生は、通貫する教育の原理や質の高い実践を創造する教師の資質能力について、斎藤喜博の教育論を基軸にそれらを意味づけながらも、一方で3人の報告の様子から「何でそんなに楽しそうで、元気なんですか？」と素朴な疑問をぶつけ、登壇者の「人となり」を引き出す場面もあった。また、加納先生は、わかば保育園や東中学校を自身が参観した際に出会った子どもたちの様子や取り組みの面白さについて実践研究の立場から価値づけ、そこでの学びや育ちの深さについて考察するとともに、それを支える教師集団の意識改革(共通理解)や力量形成について、その難しさと可能性を投げかけた。協議は特に着地点を持たずに終わったが、参加者それぞれには、宮坂先生の言う「心に燠(おき)」がつけられ、三浦先生の言う「ロマン」が伝わり、そして松倉先生の「元気と好奇心と教育への思い」が心にしみたと思う。「教育を本気で楽しむ」シンポジウムであった。

(文責 東京 佐野亮子)

### 第11回 日本個性化教育学会全国大会

開催地：仙台 会場：宮城教育大学 開催日：2018年8月11日(土)～12日(日)

なお合わせて開催予定の免許更新講習(AとB)につきましては、後日お知らせいたします。

<事務局への問い合わせ・連絡先>  
庶務部長 佐久間 茂和  
〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510  
Tel. 048-678-1681  
e-mail sakuma.a@s7.dion.na.jp  
日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第30号  
平成29年 12月2日発行  
編集責任者 事務局長 奈須 正裕  
編集 広報部 多田 信夫

